

圖るべく、中は以て雍涼を蠶食して境土を拓くべく、下は以て險要を扼して持久の計を爲すべし、是れ天の與ふる所失ふ可らざるなり」備之を善しとして、翌二十三年諸將と漢中に入り、陽平に次し、二十四年春更に沔水を渡り、定軍山に陣し、正が策を用ゐて營を作るまねす、淵兵を率ひて來て其の地を争ふ、正曰く「直ちに撃つべし」備依て黃忠をして高きに乗つて鼓譟し、敵陣を雷擊せしめ大に之を破り、淵を斬る、三月操長安より大兵を擧げて南に來る、備遙かに之を策して曰く「操來ると雖も能く爲すなし、我れ必らず漢中を有せん」と、依て險要を扼して操と持し、敢て出戰せず、月餘にして操の兵亡命するもの多く、操果して引て還る、是に於て備竟に漢中を取り、其の有する所、益州(蜀)漢中及び荆州の半に及び、三國鼎峙の勢始めて成る、嗚呼備十年前には江陵に破れ、寸分の土地をも有せざりしに、今や三國鼎峙の勢ひを成す、偉とせざる可んや

此の年建安二十三年七月備竟に漢中王と爲り、還て成都に治し、魏延を擢んで都督とし、以て漢中を鎮せしむ、更に館舍を起し、亭障を築く、成都より白水關に至る途四百餘區其

の國ために殷富なり

時に關羽兵を進めて曹仁を變に攻め八月霖雨に乗じて大に之を破り、操遣す所の援軍の將于禁を降し、龐徳を斬る、許より以南往々羽に應じ、威華夏に震ひ、操許都を移して其の銳を避んとするに至る、既にして吳の呂蒙謀て羽の後を襲ひ、江陵を取て悉く將士の家屬を収む、羽驚き還て麥城を保ち、因て逃走す、蒙兵を途に伏せて羽及び其の子平等を擒にし、竟に荆州を略す

建安二十五年操死し、其の子丕嗣立ち、竟に皇帝の位に即き、年號を黃初と號す、時に漢帝弒せらるゝの報あり、備依て喪を發して孝愍皇帝と諡し、翌年四月自から皇帝の位に即き、年號を立て、章武と號し、諸葛亮を丞相とし、許靖を司徒とし、百官を置き宗廟を建つ

此の年黃初二年にして七月備關羽のために仇を復せんと欲し、兵を率ひて吳を伐つ、臣下皆諫むれども聞かず、亮を留めて成都を守らしむ、張飛固と猛烈にして雄威羽に亞ぐ羽善く卒伍を待して士大夫に驕り、飛は君子を愛禮して士卒を顧みず、備常に飛が刑

殺の過ぐるを戒むれども聽かず、是に至て飛兵萬人を率ひて備と江州に會せんとし、
 殺するに臨んで其の部下范疆、張達等に殺さる、二人飛の首を持して吳に降る、孫權
 諸葛瑾を遣はして和を請ふ、備怒て許さず、權竟に魏に表し辭を卑ふして臣と稱す、
 劉曄魏の文帝に勸め、蜀吳兵を構ゆるに乗トて吳を襲はしむ、文帝聞かず、權を封じ
 て吳王とす

黃初三年蜀の章武二年二月備進んで統亭に軍し、數十屯を立て、營を連ぬること七百餘里、五谿
 の蠻夷等響應し、兵頗ふる熾なり、陸遜之を拒ぎ相持して戦はず、六月蜀軍の氣倦む
 を見て急に火を放て之を攻む、蜀軍大敗し、備夜逃れて僅かに白帝に入る、大に慚恚
 して曰く「豎子陸遜のために敗衄斯の如し、豈天命に非ずや」初め諸葛亮法正好術
 同十からずと雖も、公義を以て相取る、而して亮毎に正の智を奇とす、備吳を討て破
 るゝに及び、亮歎じて曰く「法孝直若し在らば此の時正は既に卒去せり必らず主上の東行を制せん、
 假令東行すども必らず傾危せざらん」と、初め魏の文帝蜀の兵營柵を連る七百餘里と
 聞さ、臣下に謂て「備兵法に通せず豈七百里の營を以て敵を拒ぐべきものあらんや、

原隰險阻を包んで營を作るものは敵に擒にせらる、是れ兵忌なり、吳必らず大に勝ん」
 と、果して其の言の如し

備大に敗るゝや、白帝城に還て病を得たり、孫權備の白帝に在るを聞き使を遣はして
 和を請ふ、備之を許す、黃初四年蜀の建興元年三月備病篤し、依て諸葛亮に命じて太子を輔け
 しめ亮は二月成都に李嚴を以て副とし、亮に謂て曰く「卿が才曹丕に十倍す、必らず能く國
 を安んじて大事を定めん、若し嗣子輔くべくんば之を輔けよ、或は不才あらば卿自か
 ら取るべし」亮涕泣して曰く「臣敢て股肱の力を竭し、忠貞の節を効し、繼ぐに死を
 以てせざらんや」備また太子を戒めて曰く「惡の小なるを以て之を爲すと勿れ、善の
 小なるを以て爲さいると勿れ、『漢書』『禮記』を讀み閑暇には諸子及び『六韜』『商君
 の書』を歴觀せよ、人の意智を益す、且つ汝丞相亮と事に從ひ之に事ふると父の如く
 せよ」と、四月竟に死す、年六十三、諡して昭烈皇帝といふ、太子禪繼ぐ、後主是也
 備既に死するに及び、諸葛亮専ら國事を擔當し、君臣輯睦して上下一怨言あし、蜀最
 も新國にして國小に兵寡さも、而かも亮は南夷を征し、又屢々兵を出して魏を征し、

未だ曾て退嬰せず、常に主動的攻撃的地位に立てり、兵屢々用ふれども、兵士怨言なく、百姓に不平なし、嗚呼幼闇の主を戴き、新造の小國を以てして、茲に至る、亮は其れ不世出の傑か、實に不世出の傑なり

蓋し諸葛亮は三國時代の『一大立者』なり、何となれば劉備をして巴蜀を取り、以て三國鼎峙の形を成さしめたるは主として亮の智謀あればなり、亮の死生は直ちに蜀の興亡なり、蜀の興亡は則ち三國時代の形勢を變更すればなり、由て少しく亮が事業を叙せん

劉備卒して後三年、黃初六年蜀の建興三年に亮は兵を率ゐて雍閬を制せり、發するに及びて謀と參軍馬謖に問ふ、謖曰く「南中其の險遠を待みて服せざると久し、今日之を破るも明日復た反せん、夫れ用兵の道は心を攻むるを上とし、城を攻むるを下とし、心戰を上とし、兵戰を下とす、願くは公其の心を服せよ」亮其の言を納れ、直ちに南中に入る南中は西南中は西所在皆勝ち、趙雋より入て雍閬を斬る、孟獲なるもの固より夷人に推服せらる、是に於て圍の餘衆を収めて亮を拒ぐ、亮之を生致せんと欲し、謀を以て獲を擒に

し、依て陣營を觀せしめ、問て曰く「如何」獲曰く「先きに虛實を知らず、故に敗れたり、今幸ひに陣營を觀る、若し止だ斯の如くんば則ち勝ち易きのみ」亮笑て之を放ち、更に來り戰はしめ、七縱七擒して更に之を放つ、獲去らずして曰く「公は天威なり、南人また反せず」と、亮進んで滇池に至り、悉く南中四郡を平げて凱旋す、是に於て軍資出所あり、蜀ために富饒なり

亮兵を修め武を講すると一年有餘、太和元年蜀の建興五年三月上書して兵を擧げ、出で、漢中の沔北に屯す、翌年春斜谷より出で、郿を取ると揚言し、趙雲、鄧芝を疑軍として箕谷に據らしめ、自から祁山に出づ、魏延亮に勸めて曰く「今夏侯楁長安にあり、怯にして智なし、今延に精兵五千を假さば、直ちに褒中より秦嶺に循て東し、子午谷より北せん、十日を過ぎずして長安に到るべく、楁必らず城を捨て、逃れん、東方と相合する頃尙ほ二十日許にして公斜谷より來れ、亦以て達するに足らん、乃ち一舉して咸陽以西定むべし」亮以て危計とし、以爲らく、坦道より隴右を取るの萬全なるに如かずと、依て大軍を率ひて祁山を攻む、戎陣齊整にして號令明肅なり、初め魏備の死

せるより數歲、寂然として聞ふるとなきを以て、殆んを備ふる所ありし。俄かに亮の出でしを聞て朝野恐懼し、天水、南安、安定皆叛きて亮に降る。魏の明帝自から西長安を鎮し、張郃に命じて亮を拒しむ。亮馬謖をして諸軍を督し、進んで張郃と街亭に戦はしむ。謖亮の節度に違ひ、舉措煩擾、水を含て山に上り、敢て下て城に據らず。張郃其の汲道を絶ち、討て大に之を敗る。士卒多く離散す。亮進んで據るべきなく、竟に西縣の千餘家を拔て漢中に還り、謖が節度に違ふを責て之を斬り、而して自から之を祭り、ために涙を流し、其の遺孤を撫して恩平生の如し。蔣琬曰く「今天下未だ定まらずして智計の士を戮す、豈惜からずや」亮流涕して曰く「孫武勝を天下に制せる所以は法を用ふると明かなれば也。今四海分裂して兵交方々に始まる、若し法を嚴にせずんば何を以て敵を討たんや」と。更に上疏して敗軍の責を引き、自から三等を貶せんと請ふ。或る人亮に勸めて更に兵を發せしむ。亮曰く「大軍祁山、箕谷に在る皆敵より多し、而かも敵を取ると能はずして自から破らるるものは、病む兵の少きに非ずして一人に在るのみ、今兵を減じ將を省き、罰を明かにして變通の道を將來に求

めん、然らずんば兵多きも何の益あらん」と。依て兵を勵し武を講じ、以て後圖を爲す。我士簡練し、民其の敗を忘るといふ。既にして孫權魏の曹休を破り、魏兵東下して關中空虛なりと聞き、十一月上疏して漢賊兩立せざるをいひ此の疏は世に之を後出師表といふ文辭誠實慷慨讀む所の泣かざるはなし十二月兵を引て散關より出で、曹眞を陳倉を圍む。然れども陳倉已に備あり、亮勝つと能はず。魏の明帝張郃を方城より召して亮を討たしむ。帝郃に問ふて曰く「卿至るも遅くして亮既に陳倉を陥るゝとなきか」郃亮が深く入て穀なきを知り、指を屈して數へて曰く「臣到るとも亮既に走らん」と。郃晨夜兵を進め、未だ至らざるに亮果して糧盡しを以て引去る。魏將王雙之を追ふ。亮擊て雙を斬る。太和三年蜀の建興七年孫權皇帝の位に即く。諸將名義を正して之を絶つべしといふ。亮聽かず。使を遣して之を賀す。亮又陳式をして武都陰平を攻めしむ。魏の雍州刺史郭淮等式を擊んとす。亮自から出で、建威に至るに及んで淮等退く。竟に二郡を平す。太和五年蜀の建興九年亮また祁山を攻む。時に曹眞死せるを以て魏帝更に司馬懿に命じて曰く「西方の事重し、卿に非ずんば附すべし」と。長安に屯して張郃以下の諸將を督せ

しむ、懿依て大兵を以て祁山を救ふ、亮懿を上邽に逆ひ、郭淮、費曜等を破り、因て大に麥を刈り、懿と上邽の東に遇ふ、懿兵を斂めて險に據る、亮が兵麥を刈ると能はず、引て鹵城に還る、懿出で、鹵城に至り、また山に登り營を造て敢て出戦せず、賈詡、魏平等屢々戦はんと請ひ、由て曰く、「公司馬蜀を畏る、と虎の如し、天下の笑ひを奈何せん」懿之を愛ひ、五月張郃をして南圍を攻めしめ、自から中道より亮に向ふ、亮魏延等をして之と逆戦せしめ、大に懿の軍を破り、獲る所頗る多し、懿退きて堅く營を保つ、既にして亮糧盡るを以て軍を退く、懿張郃をして之を追撃せしむ、亮伏弩を設けて郃を斬る

亮屢を勸め武を講じ、木牛流馬を作て米を斜谷に運集せしめ、士民を休養する、三年、青龍二年蜀の建興十二年兵十萬を以て斜谷より出で、進んで渭水の南に陣す、司馬懿兵を引て渭を渡り、水を背にして壘を作り、以て之を拒ぐ、諸將に謂て曰く、「亮若し武功に出で山に據て東せば太だ憂ふべし、若し西五丈原に止まらば諸將無事ならん」と、亮五丈原に屯す、是より先き數々出でしも、皆糧運繼がざるがために功なかりしを以て、乃

ち兵を分て屯田し、久留の計を爲す、耕すもの價、濱居民の間に雜りて百姓安堵し、軍に私をなし、懿之と相持すると百餘日、亮屢々戦を挑めども出でず、亮乃ち懿に贈るに巾幗婦人の服を以てす、懿慚悲し、上表して戦はんと請ふ、魏帝辛毗を遣はして之を制せしむ、姜維亮に謂て曰く「辛毗至れり、敢また出でじ」亮晒て曰く「彼れ固と戦志なし、而して固く戦を請ふは以て其の武を衆に示さんとするのみ、將已に軍にあり、君命も受けざる所あり、仲達懿の字たるもの苟くも能く我れを制せば、豈千里戦を請はんや」亮曾て使者を懿に遣はす、懿其の寢食及び事の煩簡を問ふて戎事を問はず、使者對へて曰く「諸葛公夙に起き夜に寐ね、副二十以上は必らず親から覽る、啖ふ所は數升に至らず」懿人に告げて曰く「諸葛孔明食少くして事煩はし、其れ能く久からんや」と、亮果して病あり、已にして篤し、劉禪尙書僕射李福を遣はして病を訪はしめ、由て諮ふに國家の大計を以てす、亮曰く「卿が問ふ所は公琰禪の字宜し」福また請ふ「蔣琬の後は誰か任すべき」亮曰く「文偉琬の字以て之に繼ぐべし」福又其の次を問ふ、亮答へず、八月竟に陣中に卒す、年五十四、長史楊儀軍を整て返る、百姓奔つて之を懿に告

と、懿由て之を追ふ、姜維備に勸めて旗を反し、鼓を鳴らして將に懿に向ふが如くせしむ、懿乃ち退き走て敢てたま追らず、是に於て備陣を拂ふて去り、谷に入て而して後に爽を發す、懿の退くや、百姓ために諺を爲つて曰く「死せる孔明、活ける仲達を走らす」懿之を聞て笑て曰く「我れ能く生を料つて死を料ると能はず」と、更に亮の營壘の所を巡視して歎じて曰く「孔明は實に天下の奇才なり」

亮が人品や實に高し、蓋し此の時代第一の人傑なり、止だ蜀中名士乏く、之と共に大業を成すべきものなし、然りと雖も亮が智慮縝密にして且つ治體に通曉せる、忠誠にして謙芥の私情なきは、純臣の模範として支那の歴世に一も其の匹儔なし、嗚呼彼の國人今に至るまで尙ほ之を推尊する、寔に其の所なる哉

亮の死するや、蜀の力既に盡きたり、但だ蔣琬、費禕相次で軍國の事を管し、謹厚慎重を以て幸ひに過失なかりしと雖も、姜維兵事を總督するに及びては、血氣に逸して屢々兵を用ひ、益々其の力を耗す、故に司馬氏策を決し、鍾會、鄧艾をして蜀を攻めしむるに及びては、蜀中恰かも破竹の如くに碎け、劉禪堂々たる天子を以て出で、軍門

に降伏するに至る、實に亮死してより後三十年なり

劉禪の降るや、魏封トて以て安樂公とす、安樂公の愚なる實に及ぶ可らず、其の蜀の天子たるや、徒らに後宮に於て狎戯するのみ、其の降るに及んで舉家洛陽に移る、一日司馬昭安樂公を招き、諸將と共に飲宴し、依て蜀の技を爲す、坐客皆感愴し、而して安樂公獨り喜笑自若たり、昭買克に謂て曰く「人の情なきとは是に至る、諸葛亮をして在らしむるも、之を輔けて全ふするを得じ、況んや姜維の輩かや」と、他日昭又安樂公に問て曰く「或は蜀を思ふや否や」公曰く「此の間樂んで蜀を思はず」蜀に到りて至 昭之を聞て公に謂て曰く「若し晋王昭また問はば、宜しく泣て答ふべし、曰く、先人の墳墓遠く岷蜀にあり、心西を悲んで日として思はざることを、由て其の目を閉ぢよ」會々昭また公に問ふ、公答ふると正の言の如くす、昭曰く「何を太だ卻正の語に似たる」公驚き觀て曰く「誠に尊命の如し、今の對は皆正の教ふる所なり」と、左右皆之を笑ふといふ

然りと雖も蜀亡ぶるの翌々年、魏も亦司馬氏に篡せられたり、而して三國の勢口が

第十一 紀傳の三

孫權記

吳は江東を掩有せり、江東は即ち古の楚の地なり、其の國を開くと最も早く、而して其の帝號を稱する最も遲しと雖も、而かも其の亡ぶるや最も遲し、乃ち國を保つと其實に第一たり

吳の業は孫堅、孫策父子之を創り、孫權之を守りて基礎甚だ堅く、且つ境土も弘まれり、蓋し孫氏は孫武の後にして、江東吳郡に出づ、吳郡は楊子江海に入るの邊にありて東海に面せり、去れば躁急奇矯なる江邊人種の特格は、孫堅等父子に於ても亦之れあり、但だ權は沈重にして父兄に育す、而して器識あり、形勢に明かに、能く人を用ゐて能くを盡さしむ、是れ堅父子の半途にして僵れ、而して權其の業を全くして久しく江東を保有せる所以ならずや

孫堅字は文臺、吳郡富春の人なり、猛烈にして英氣人に絶す、黃巾の賊起るに及び、

朱儁に從て功を立て、別部司馬に拜す、後に司空張温涼州の亂賊邊章、韓遂等を討するや、堅を表して車騎將軍とし、長安に屯す、温詔書を以て董卓を召す、卓遷延して至り、張大語す、堅温に勸めて卓を斬らしむ、温從はず、然れども議者皆堅が志氣の壯なるを嘆稱すといふ、既にして堅長沙の賊區星を討平し、長沙太守に任せらる

董卓朝政を擅にし、關東の諸將兵を擧げて之を討するに及び、堅行て袁術に屬し、進んで卓の兵を破り、先づ洛陽に入る、初平三年術の命に従ひ、荊州の劉表を討つ、表黃祖を遣はして樊鄧の間に逆戦せしむ、堅擊て祖を破り、追て漢水を渡り、竟に襄陽を圍み、單騎峴山を廻る時祖の軍士に射殺さる、時に年三十七

堅に四子あり、策、權、翊、匡といふ、共に夫人吳氏の所生なり

孫策字は伯符、姿儀に美はしく、英風颯爽たり、且つ性潤達にして容を好みて談論す、始め母と共に舒に在り、周瑜と友とし善く、士大夫を収合す、江淮の間、人心多く之に歸す、堅死するに及び、策時に年十八堅の死初平十二年なり父を曲阿に葬り、江を渡り、江都に居り、次で母と共に曲阿に徙り、吳景に就て兵數百人を募り、興平元年袁術に従ふ、術

甚だ之を奇とし、堅が部曲千餘人を以て策に返與す。興平二年堅の舊將朱治、袁術の政徳立たざるを見、策を勸め、歸て江東を取らしむ。初め策の江都に在るや、計を張紘に乞ふ、紘曰く「若し丹楊太守は甲に吳景に投下、兵を吳會に収めば、則ち荆楊一にすべく、讐敵報すべし、長江に據りて威徳を奮ひ、群穢を誅除し、漢室を匡輔せば、功業桓文に侔からん、豈止た外藩のみならんや」と、策是に於て術に説て曰く「家に舊恩有て江東に在り、願くは舅吳景を助けて横江を討たん、横江已に拔けば因て本土に投下、召募して三萬人を得べし之を以て明公袁術を助けて漢室を匡輔すべし」と、術屢々策を欺き、心に恨まるゝを知るも、當時劉繇曲阿に據り王朗會稽に在るを以て、以爲らく、策未だ之を定むるに足らずと、故に之を許し、表して折衝校尉とし、行殄寇將軍とす、兵統に千餘、騎數十匹に過ぎず、然れども賓客の請て隨ふもの數百人、歷陽に至るに及んで衆五六千、竟に江を渡り轉戦す、向ふ所披靡せざるなし、策時に位就むるも、尙ほ年少なるを以て士民皆呼んで孫郎といふ、百姓孫郎至ると聞けば皆魂魄を失ひ、長吏城廓を委し、山林に窟伏す、然れども策が軍

至るに及び、號令嚴明、秋毫も侵す所なし、百姓大に喜び競ふて牛酒を以て軍を饋ふ、策竟に劉繇を曲阿に攻めて之を走らし、自から曲阿に入つて令を布く、威江東に震ふ、策の將呂範策に謂て曰く「今將軍士衆盛にして紀綱猶ほ振はず、範願くば暫く都督を領し、將軍を佐けて之を部分せん」策曰く「士衡已に士太夫たり、豈に職に屈して軍吏の細事に關すべけんや」範曰く「然らず、今本土を捨て、將軍に従ふものは、妻子の爲めにするに非ず、世務を濟さんと欲してなり、譬へば同舟海を渡るが如し、一事半からずんば俱に其の敗を受けん」と、乃ち出で、甲を解き袴褶を着、鞭を執り闕下に詣て事を啓し、自から都督を領すといふ、是より軍中肅睦し、威禁大に行はる、策又張紘を正義校尉とし、張昭を長史とし、常に一人をして居守し、一人をして從軍せしめ、昭を待するに師友の禮を以てし、文武の事一に之に委し、北方の士太夫の書を得る毎に専ら美を昭に歸し、歡笑して曰く「昔管仲齊に相たり、一にも仲父、二にも仲父、而して桓公霸者の宗と爲れり、今子布昭のの賢にして而して我れ能く之を用ふ、功名獨り我にあらざらんや」

建安元年策浙江を渡り、會稽を取り、東治を屠る、虞翻會稽の太守王朝に説て降らしむ、策仍て自から會稽太守となり、翌年袁術僭して皇帝と稱するに及び、書を贈て竟に之と絶つ、建安三年策討逆將軍に任じ、吳侯に封せらる。始め周瑜、魯肅等尙は袁術に屬す、竟に術の爲すに足らざるを知り、官を棄て江を渡りて策に従ふ、策また甬里を攻めて太史慈を擒にし、縛を解て之を降す、建安四年廬江太守劉勳を襲て之を取り、由て豫章を徇ふ。建安五年曹操袁紹と官渡に相持するや、策許を襲ふて天子を迎へんとす、會々出獵して前の吳郡太守許貢の客に射られ、頰を創く、醫曰く「治すべし、當るに能く自から護るべし、百日動さ激すると勿れ」策一日鏡を啓きて面を熟視し、左右に謂て曰く「我が面斯の如し、また功業を建つべけんや」兒を推し大に奮ふ、是に於て創皆分裂す、乃ち起たざるを知り、張昭等を枕頭に招きて曰く「中國方々に亂る、夫れ吳越の乘、三江の險を有せば、以て成敗を觀るに足らん、公等能く我が弟を輔けよ」又弟權を呼び、偏ばしむるに印綬を以てし其の夜竟に死す、年僅かに二十六、權嗣を立つ。

史にいはく、孫策、周瑜共に女色に精を盡し、爲めに死を速かにすと、蓋し策の妻は大喬にして瑜の妻は小喬なり、所謂二喬なるものは是れなり、蓋し江東は美人の産する所、而して二喬實に當時無雙の國色と稱せらる、傳へらる、曹操銅雀臺を建てしとき、二喬を取て臺に住せしめ、共に歡樂を盡さんとを希望せりと、故に諸葛亮の周瑜を激勵して操の大軍を防がしむるや、實に言を之に托して以て瑜を挑發したりといへり、策、瑜と共に眉目清秀の好男子を以てして、無雙の國色に偶す、其の精力を損せるや察すべし、策創を得しといふと雖も瑜と同じく暴怒躁激を以て特に死期を早くし、瑜も年三十六にして死せり、英雄色を好むといふと雖も抑も惜むべからずや。孫權字は仲謀、方口大頤にして目に精光あり、父堅之を異として貴象ありとす、劉琦曾て人に語て曰く「我れ孫氏の兄弟を觀るに、各々才秀明達なるも、祿祚終へざらん、止た中弟孝廉孝廉は官の名孫權時に孝廉に擧げらる故にいふ形貌奇偉、骨相恒ならずして大貴の表あり、年又最も壽ならん」と、權、性度弘朗、仁にして斷多く、俠を好み士を養ふ、早く名を知らる、と父兄の如し、策諸郡を定むるとき權年十五、毎に計謀に參同す、策甚だ之を奇とし、

自から以て及ばずとし、賓客を會する毎に常に權を顧みて曰く「此の諸君は汝が將なり」

策死するに及び、權嗣立ち、哭未だ息まざるに長史張昭諫めて曰く「是れ寧ろ哭する時ならんや」其の服を改めて馬に上り、出で、諸軍を巡視せしむ、時に會稽、吳郡、丹楊、豫章、廬陵其の有るも、深險の地猶ほ未だ盡く従はず、而して英豪散じて州郡に在り、賓族寄寓の士安危去就を以て意を爲して未だ君臣の固めあらず、張昭、周瑜等謂ふ、權共に大業を成すべしと、故に心を委して服事す、權また昭を待つに師傅の禮を以てし、而して周瑜、程普、呂範等を將率とし、俊秀を招き名士を聘し、魯肅、諸葛瑾始めて賓客となる、依て諸將を部分し、山越を鎮撫して未だ従はざるを討つ

建安七年曹操權に命じて質子を納れしむ、周瑜曰く「將軍父兄の餘資を承て六郡の衆を兼ね、兵精しく糧多くして將士命を用ひ、山を鑿、海を煮て海内富饒なり、何を苦んでが質を送らん、質一び入らば曹氏と相首尾せざるを得ず、則ち召命には往かざるを得ず、斯の如くんば人に制せられん、豈南面して孤と稱するに同じからんや」

吳夫人孫堅の妻曰く「公瑾の謙是なり、公瑾周瑜の字伯符孫策の字と同年にして一日後るのみ、我れ之を視る子の如し、汝其れ兄事せよ」と、依て拒んで質を送らず

建安八年西黃祖を討ち、十年上饒を得、十二年また黃祖を征し、十三年竟に黃祖の城を屠り、祖を斬る、此の歲賀齊をして駭歎を討たしめ、歎を分て新定、始新、黎陽、休陽縣とす

此の年劉表卒し、操荆州を降し、劉備逃走す、權魯肅を遣はして荆州を窺はしめ、依て備を助けて操の軍を赤壁に邀へて大に之を破る

建安十四年周瑜曹仁を破りて南郡を取る、權依て瑜を南郡太守とす、備來り權を見、荆州を都督せんことを求む、呂範權に勸めて備を留めしめんとす、吳の將また備を殺さんと欲するもの多し、獨り魯肅權を諫めて曰く「將軍神武命世と雖も而かも曹操威力實に重し、今荆州始めて服すと雖も恩信未だ洽からず、宜しく備に貸して之を撫安せしめ、依て操の敵を多くすべし、是れ計の上なり」と、權之に従ひ、南岸の地を分て備に給し、表して荆州の牧を領せしむ、操之を聞き、書を作るに方て筆を地に落せりとい

ふ。

建安十五年豫章を分て鄱陽郡とし、長沙を分て漢昌郡とし、魯肅を太守として陸口に屯せしむ、十六年權徙て秣陵今の南京に治す、始め張紘秣陵の山川形勝なるを以て勸めて治所とす、劉備も亦權を勸めて之に居らしむ、權依て徙り、明年石頭に城さ、秣陵を改めて建業といふ、曹操來侵すと聞き、濡須塢を築く

建安十八年操濡須を攻む、其の歩騎四十萬と號す、權衆七萬を以て之を拒ぎ、夜操を襲ふて三千餘人を獲、沒溺するもの亦數千人に及ぶ、操依て堅く守て敢て戦はず、權乃ち自から輕船に乗て濡須口より操の軍に入る、諸將皆以て戦を挑むとす、操曰く「是れ必らず孫權自から我が軍伍を見んと欲するのみ」と、軍中に令し強弩を精嚴して妄に發せざらしむ、權行くと五六里、廻り返て鼓吹す、操其の舟船器仗軍伍の整々たるを見、喟然として歎じて曰く「兒を生まば當さは孫仲謀の如くなるべし」と權また書を操に贈て曰く「春水方々に生ず、公宜しく速かに去るべし」また別紙にいふ「足下死せずんば孤安さを得ず」操諸將に語て曰く「孫權我れを欺かず」と乃ち軍を撤し

て還る、初め操江濱郡縣の權に略せらるるを恐れ、徵令して内に移らしむ、民轉た相驚るる、廬江、九江、蕪春、廣陵より戸口十餘萬、皆東して江を渡る、江西竟に空虚に合淝以南止た皖城あり

建安十九年權皖城を討て之に勝つ、此の歲劉備蜀を定む、是より先き建安十五年周瑜權に説て曰く「今曹操新たに折衝赤壁の敗を憂心腹にあり、未だ將軍と兵を連ると能はず、乞ふ奮威と共に進んで蜀を取らん、蜀を得て張魯を并せ、因て奮威を留めて固く其の地を守らしめ、好く馬超と結援し、瑜還て將軍と襄陽に據て以て操に迫らば、北方圖るべきなり」權之を許す、瑜江陵に還て行裝を修めんとし、途にして巴丘に卒す年三、權哀動して曰く、「公瑾王佐の資あり、今忽ちにして短命なり、孤何に頼らんや」と、瑜の遺請により、魯肅をして代て兵を領せしむ、然れども巴蜀を謀るの計は劉備に阻せられて遂げず、而して備竟に蜀を取れり、權依て先に貸す所の荊州の諸郡を求めしめ、備從はざるに及んで兵を擣ふ、既にして操漢中を犯すと聞き、備和を求め、權と約して荊州を分つ、權還て更に合淝を攻め、大に張遼に破られ、凌統之に死す、賀齊三千

人を率ゐて津南にあり、權を迎へて船上せ救ふて還る、依て泣て權を諫めて曰く、「人主は當さに重きを持すべし、今日の事群下震怖すると天地なきが如し、願くは之を以て終身の戒とせよ」權涙を収めて曰く、「大に怒づ、謹んで之を心に刻せん、管仲に書するのみに非ず」と、時に建安二十年八月也

建安二十一年冬操滯須を攻む、二十二年權竟に降を操に入る、然れども是れ眞の降に非ざるあり、何となれば權また一質子を送らす、一介の土地を割かず、一權勢を減せざればなり、降といふは管仲書を贈り辭を卑ふして臣と稱し、以て操の大軍を解けるのみ、權將軍周泰を留めて滯須を守らしむ、諸將泰が門閥賤しきを以て服せず、權諸將を會して宴飲し、泰に命じて衣を解かしめ、手から其の瘡痕を指して之に問ふ、因て臂を把て流涕して曰く「幼平泰の字、卿は孤が兄弟のために戦ふを熊虎の如く、創を被ひると數十、我れ何の心か卿を待するに骨肉の恩を以てし、卿に委するに兵馬の重きを以てせざらんや」諸將乃ち服す、此の年魯肅卒す十六年、權嚴峻をして代て兵を督して陸口を領せしむ、峻固く辭するに樸素の書生軍事に熟せざるを以てす、權依て呂蒙を

以て之に代ふ、衆皆峻が能く實を以て讓るを稱すといふ

建安二十四年權呂蒙をして關羽を獲、荊州を取らしむ、初め蒙以爲らく、羽驍勇にして兼併の心あり、且つ國の上流に居る、其の勢ひ久ふしがたしと、密かに權に告て曰く「羽の君臣其の詐力に矜り、所在反覆す、腹心を以て待つ可らざる也、今羽未だ東に向はざるものは、主君聖明にして蒙等尙は存するを以てのみ、今に及んで之を圖らずんば後必らず禍を貽さん、如かず羽を取て全く長江に據り、益々形勢を張らんには」と、權之を可とす、權又會て其の子のために婚を羽に求む、羽罵て之を斥く、權怒り、羽樊を攻むるに及び、竟に其の後を襲ふて荊州を取らんとす、蒙も亦上疏して曰く「羽樊を討て而して多く公安、南郡に備兵を留むるは、必らず蒙が其の後を圖らんとを恐れてなり、蒙常に病疾あり、乞ふ士衆を分て建業に還り、疾を治するを名とせん、羽之を開かば必らず、備兵を撤して盡く襄陽に赴かん、依て大軍江に浮び、晝夜馳上て其の空虚を襲はし、南郡下すべく、羽擒にすべき也」と、竟に病篤しと稱す、權仍て故らに公然蒙を召還し、陰かに共に謀議す、權問ふ「誰を以て代らしむべき」と、蒙曰く

「陸遜意思深長、才重きを負ふに耐たり、而かも未だ遠く名あらず、羽に忌まれず、宜しく之を用ふべし」權乃ち遜を偏將軍に拜し、以て蒙に代ふ、遜陸口に至りて書を羽に與へ、其の功績を稱して自から深く抑損す、羽果して大に意を安んじ、漸く守兵を撤して以て樊に赴き、竟に于禁等を擒にし、兵威華夏に振ふ、是に於て遜具さに羽を擒にすべきの策を陳す、羽また糧乏じきを以て擅に湘關の米を取る、權之を聞て自から發し、先づ蒙をして前進せしめ、又書を曹操に贈り、羽を討て自から効さんと請ふ、蒙海陽に至て悉く其の精兵を船中に伏し、白衣をして糧を操らしめ、商人の衣を服して晝夜兼行し、羽が置く所の江邊の屯候に至て盡く之を収縛す、是を以て羽急を聞知するに及ばず、蒙竟に南郡に至り、糜芳及び傅士仁を降し、蒙自から江陵の城中に入り、關羽及び將士の家屬を得て懇懇に之を待し、法令を嚴にして敢て犯さしめず、疾病には醫藥を給し、飢寒には衣糧を賜へ、羽の陣中より使者至れば特に厚く之を饗し、家々の妻子をして將士に音問を通せしむ、故に羽の將士皆家門の恙なきを知らず、敢て闘心なし、陸遜別に宜郡を取り、秭歸及び江東を得、夷陵に屯して峽口を守り、以て

蜀に備ふ、羽當陽に歸り、西麥城を保つ、權至て之を誘ひ降らしむ、羽僞て降り、幡旗を立て象人を城上に出し、間に乗つて逃走す、其の兵皆散じ、僅かに十餘騎を餘すのみ、權先づ朱然、潘璋をして其の徑路を斷たしむ、十二月璋が司馬馬忠羽及び其の子平等を獲て之を斬る、權竟に荊州を定む、操表して權に荊州牧を領せしめ、南昌侯に封す

既にして呂蒙病で卒す年四十二陸遜之に代る、權曾て遜と周瑜、魯肅及び蒙を評して曰く「公瑾雄烈にして膽零人を兼ね、竟に孟徳を破り、荊州を開拓す、逸馬として繼ぎ難し、公瑾昔子敬魯肅の字を要して東來し、孤に達するを得たり、孤共に宴語するに、大零帝王の業に及ぶ、是れ一快なり、後に孟徳劉琮を獲るの勢に由て張言す、當さに數十萬の衆を率ひて水歩共に下ると、孤普く諸將に計を問ふに能く先づ對するなし、子布昭儀文表は俱に宜しく操に迎へ降るへしといふ、子敬乃ち其の不可なるを駁言し、我に勸めて急に公瑾を呼び、任するに衆を以てして逆擊せしむ、是れ二快なり、且つ其の計策を決する、意蘇張に出づると遠し、後我れに勸めて孟徳に地を貸せるは、是れ一短

と雖も以て其の二長を損するには足らず、周公は備を一人に求めず、故に我れ其の短を忘れて其の長を貴ひ、常に以て鄧禹に比す、子明呂蒙少時我れ謂ふ、劇易を解せず、果敢にして膽あるのみと、長するに及びて學問開益、籌略奇至、以て公瑾に次ぐべし、但だ言議の英發之に及はざるのみ、其の關羽を圍り取るに及んでは子敬に勝れり、子敬孤に答ふる書に云ふ、帝王の起る皆驅除あり、羽忌むに足らずと、是れ子敬内辨する能はずして外大言するのみ、我れ亦之を恕して苟くも責めず、然れども其の軍を作るや、屯營失はず、令行はれ禁止み、郡界に虜負なく、路に遺れたるを拾はず、其の法も亦美あり」と、始め江東齊々多士と稱せらる、權能く人を知て之に任ず、能く操に下らざりし所以なり

建安二十五年曹操死し、丕嗣立ち、竟に帝號を稱し、黃初と改元す、翌年劉備また帝位に即ぐ、權も亦私かに帝號を稱するの志あり、此の年黃初二年公安より都を鄂に徙じ、改めて武昌と名け、武昌、下雒、尋陽、陽新、柴桑、沙羨の六縣を以て武昌郡とす、魏の曹丕權を封して吳王とす、群下議して曰く「宜しく上將軍九州伯と稱すべし、魏の

封を受く可らず」權曰く「九州伯古より未だ聞かず、昔沛公亦項羽の封を受けて漢王たり、蓋し時宜のみ、復た何を損せんや」と、竟に之を受く、時に劉曄丕を諫めて曰く「孫權を吳王に封する不可なり、王位は天子を去ると一階のみ、今其の僞降を信じ、其の位號を崇くして以て之を封殖するは、猶ほ虎に翼を傳るが如きなり」丕聽かず、邢貞をして吳に至らしむ、權出で之を迎ふ、貞門に入て車より下らず、張昭貞に謂て曰く「夫れ禮敬せざるとなく、法肅まざるとなし、而して使君自から尊大にす、豈江南寡弱にして尺寸の刃さしとする乎」貞俄かに車より下る、吳の中郎將徐盛忿然として同列に謂て曰く「盛等國家のために許洛を并せ、巴蜀を呑むと能はず、我が君をして貞と盟はしむるは亦辱ならずや」と、由て涕淚横流す、貞聞て其の徒に謂て曰く「江東の將相斯の如し、久しく人に下るものに非ず」

此の年蜀主劉備自から大兵を率ひて來り擊つ、權諸葛瑾を遣して和を請はしむ、或る人瑾が私に蜀に通するを言ふ、權曰く「我れ子瑜瑾の字と死生不易の誓あり、子瑜が我れに負かざるは猶ほ我が子瑜に負かざるか如し」陸遜も亦表して瑾必らず此の事なきを

明かにす、權報トて曰く「玄德昔孔明を遣して呉に至らしむ、我れ曾て子瑜に語て曰く、卿は孔明と同産なり、何ぞ之を留めざる、子瑜言はく、亮已に質を人に委す、義二心なし、弟孔明はが留まらざるは猶ほ瑾が往かざるが如しと、其の言神明を貫くに足れり、今豈是れあるべけんや、我れと子瑜と神交といふべし、外言の能く問する所に非ず」と、瑾既に至りて和を議す、備許さず、軍を秣歸に進む、權乃ち陸遜を大都督として之を拒がしむ、諸將多く矜持して相從はず、遜劍を接じて曰く「劉備は天下に名を知られ、曹操と雖も憚られる所、今來て我が境上を侵す、我れ書生と雖も國家諸君を屈して相承望せしむるものは、僕が方寸能く辱を忍び重きを負ふべきを以てのみ」と、壘を堅ふして漫に戦はざらしめ、銃亭に至て備の陣と相對す、既にして蜀の兵意疲れ氣沮むを度り、先づ一營を攻めて利あらず、諸將皆曰く「空しく兵を殺すのみ」遜曰く「我れ已に之を破るの術を得たり」と、人毎に一把の茅を持しめ、火を敵營に投ト、攻て之を抜き、竟に蜀の四十餘營を破る、備僅かに身を以て免かれ、白帝城に入る、時に黃初三年六月なり

此の年魏主丕吳の質子至らざるを怒り、九月兵を分て吳を攻む、權乃ち呂範等を遣はし、舟師を以て之を拒ぎ、諸葛瑾、潘璋、楊傑をして南郡を救はしめ、又使を遣はして蜀と連和し、始めて年號を立て、黃武といふ

黃初四年蜀の建興元年 吳の黃武二年 魏の將曹仁步騎數萬を以て濡須に向ふ、朱桓兵僅かに五千人、諸將皆懼る、桓曰く「勝負は將に在て多寡に非ず、今仁智勇に非ず、士卒甚だ怯、千里歩行して人馬罷困す、桓諸君と高城に據り、江に臨み山を背ひ、逸を以て勢を待ち、主を以て客を制す、是れ百戰百勝の勢なり、曹丕自から來るも憂ふるに足らず、況んや仁等をや、依て旗鼓を伏せ弱を示して敵を誘ふ、夏侯尙船に乗らんと欲し、步騎を率ひて渚中に入て安屯し、浮橋を作て往來す、皆以爲らく城必らず抜くべしと、董昭獨り曰く「今渚中に屯するは至て深く、浮橋して渡るは至て危し、一道にして行くは至て狹し、三者は兵家の忌む所にして今之を行ふ、恐らくは渚中の精銳吳に獲られん、且つ江水漸く滿んとす、若し一旦俄かに増さは、何を以て防禦せん」丕乃ち尙等に命じて促し出でしむ、吳兵兩頭より並進し、魏兵二道より引去り、僅かに濟るを得、

後旬日にして江水大に漲る、不昭に謂て曰く「君此の事を論ずる何ぞ其れ審かなるや」と、會々大疫あり、不悉く諸軍を引て洛陽に還る

翌五年曹丕また兵を率ゐて來り討ち、司馬懿を留めて許昌を鎮せしめ、水軍を爲り、自から龍舟に御して廣陵に至る、徐盛舟船を江に列ね、木を植へ葦を衣せて疑城假樓を作り、石頭より江に至て一夕にして成る、魏兵江西より望んで甚だ之を憚かる、時に江水盛長す、不臨望して歎じて曰く「魏武騎千群と雖も用ふる所なし、未だ圖るべからざるなり」と、會々暴風飄蕩し、龍舟幾んど覆没せんとす、竟に師を還す

黃初六年六月顧雍を丞相とす、雍人となり寡言、舉動時に當る、權曾て嘆じて曰く「顧公言はず、言へば必らず中るとあり」雍器度人に過ぐ、會て侯に封せられて還るに、家人知らず、丞相となるに及び、文武各々其の能に従ふて還才なし、八月曹丕また舟師を以て藤より渦に循て淮に入り、十月廣陵に至り、江に臨んで兵を觀す、戎卒十餘萬、旗旌數百里、江を渡るの志あり、權兵を嚴にして固く守る、時に大寒、舟氷で江に入るとを得ず、不波濤の洶湧するを見、嘆じて曰く「嗟呼賊は天の南北を限る

所以なり」と、竟に還る、孫韶乃ち高壽等を遣はし、敢死の士五百人を率ゐて徑路より夜魏兵を遮る、丕大に驚ろき、壽等車重を獲て歸る

黃初七年曹丕死す、權江夏を征し、石陽を圍み勝たずして還る

太和二年蜀の建興六年 吳の黃武七年潘陽太守儗り叛き、魏將曹休を誘ふ、七月權皖口に至り、陸遜をして大に休を石亭に破らしむ、此の年呂範卒す

太和三年四月權竟に皇帝の位に即き、黃龍と改元し、父堅を追尊して武烈皇帝といひ、子登を皇太子とす、是に於て天下三分の名實完く成り、豫、青、徐、幽は吳に屬し、襄、冀、拜、涼は蜀に屬し、其の司州の土は函谷關を以て境とす、九月權都を建業に移し、陸遜をして登を輔けて武昌を守らしむ

太和六年蜀の建興十一年 吳の嘉禾元年三月周賀、裴潛をして海上遼東に抵らしむ、二人魏將田豫に成山に要撃せられ、賀死す、十月魏の遼東太守公孫淵、權に藩と稱し、貂馬を獻す、權大に悦び、淵に爵を加ふ、翌年張彌等を遣はし物を贈らんとす、群下皆諫むれども聽かず、淵果して彌を斬り、首を魏に送る、權大に怒り、自から淵を征せんとし、諫めに

從て止む、

青龍二年蜀の建興十二年 吳の嘉禾三年五月權陸遜、諸葛瑾等を遣して江夏沔口に屯し、孫韶、張承等に廣陵淮陽に向はしめ、自から大衆を率ゐて合淝新城を圍む、此の時蜀の諸葛亮武功に出づ、故に權以爲らく、魏主曹叡遠く出づると能はずと、然るに敵は司馬懿をして亮を拒がしめ、自から水軍を以て東征す、未だ壽春に至らざるに權引て還り、孫韶も亦退く、八月諸葛恪をして山越を討しむ、十一月潘濬武陵の蠻夷を討平して武昌に凱旋す

景初三年蜀の延熙二年 吳の赤烏二年孫怡等を遼東に遣はし、魏の守將を撃たしむ、十月將秘南夷賊を

討つ、秘の部叛するものあり、衆數萬人に及ぶ、權呂岱等をして悉く之を討平せしむ

正始二年蜀の延熙四年 吳の赤烏四年諸葛恪六安を攻む、全琮魏の將王凌と戰ふて破る、又朱然は樊を

圍み、諸葛瑾祖中を取る、五月登卒す、司馬懿來りて樊を救ふ、吳の軍利あらずして退く、此の年諸葛瑾卒す

正始四年蜀の延熙六年 吳の赤烏六年諸葛恪六安を討て魏の將謝順を破る、十一月顧雍卒す、此の歲司

馬懿軍を率ゐて舒に入り、諸葛恪院より柴桑に還る

五年陸遜を以て丞相とす、六年二月遜卒す、其の子杭建武校尉となり、代て其の衆を領す、此の年八月陳勳を遣はし、句容中道を鑿り、小其より雲陽西城に至り、會市を通じ邸閣を作る、七年朱然魏の祖中を討つ、九月步騭を丞相とす、八年全琮及び步騭卒す

嘉平元年蜀の延熙十二年 吳の赤烏十二年朱然卒す、二年魏將王昶南郡を圍み、荊州刺史王基西陵を攻む、

權戴烈、陸凱をして之を拒がしむ

三年權年號を太元と改む、此の冬病あり、翌年又神鳳と改元し、四月死す、年七十一、權人を知て能く任じ、文武の才能を盡さしめ、最も能く士に下る、之れを以て豪傑志を歸し、江東の人物齊々たりと稱せらる、而かも長江の險に依て自から拒ぎ、魏と雖も以て加ふると能はざるあり、然りと雖も權も亦江を渡りて魏を擣き、機を決し勢ひに乘じて衝を天下に争ふと能はず、會々江を渡りて敵を擣けは、殆んど取衄せざることをし、吳人舟師に熟して、步戰騎圍に弱きが故か、抑も又其の力足らざるか、蓋し策の評能

く中れるは妙といふべし

權死するや子亮嗣ぎ立ち、諸葛恪剛狠自から用ひて權を専らにし、竟に誅殺せらる、然れども權臣勢力を振ふの弊之より發し、亮は孫綝に廢せられて琅琊王休中子嗣で立てり、既にして琳誅に伏し、張布専ら政を執て君主の聰明を掩蔽し、休死し其の姪皓立つに及び、荒淫凶逆にして名士漸く亡び、國政日に非なり、而して司馬氏既に蜀を滅し魏を篡し、銳意四境を開拓し、主雄才あつて臣下智勇甚だ多し、吳長江の險ありと雖も奚んぞ能く守らんや、晋の大康元年孫皓出で降りて吳全く亡ぶ、權死してより是に至て二十八年、蜀亡びてより後十七年實に紀元九百八十年、西曆二百八十四年なり

第十二 文學

支那の文學は大に春秋戰國時代に發し、唐に至て盛んに、宋に至て正さに熟せり、三

國時代は戰亂の代、固より文學なし、然れども當時旺盛なる氣象はまた往々詩文に發し、就中魏には文雅の士甚だ多く、上下の唱酬頗ぶる盛なり、故に之より以後馴致して竟に六朝妍麗の文となり、一轉して唐代の文學となれり、三國時代の文學を見るも其の意を茲に効さは其の沿革を知るに於て多少の資なくばあらず、詩は詩經を以て最古のものとし、五言は漢の王陵蘇武の應酬を以て嚆矢とすといひ、七言は又其の後に創まる、故に詩は三國時代に於て最も卽創に屬すべし、然れども雅音雍々として掬すべきものあり、未だ六朝浮華の體に陥るらず、以て此の時代の氣象を徵すべし也

與鍾大理書

魏 文帝

丕白。良玉比德君子。珪璋見美詩人。晋之垂棘。魯之瓊瑤。宋之結綵。楚之和璞。價越萬金。貴重都城。有稱。曠昔流聲將來。是以垂棘出。晋。虞。虢。雙禽。和璧入。秦。相如抗節。竊見玉書。稱美玉白如。潔肪。黑譬純漆。赤擬鷄冠。黃侔蒸栗。側聞斯語。未親厥狀。雖德非君子。義無詩人。高山景行。私所慕仰。然四寶遯焉已遠。秦

漢未聞有良比也。求之曠年不遇。厥真私願不果。饑渴未副。近日南陽宗惠叔稱。君侯昔有美瑛。聞之驚喜。笑與扑會。當自白書。恐傳言未審。是以令舍弟子建。因荀仲茂。時從容喻鄙旨。乃不忽遺。厚見周稱。鄴騎既到。寶玦初至。捧匣跪發。五內震駭。繩窮匣開。爛然滿目。猥以蒙鄙之姿。得親希世之寶。不煩一介之使。不損連城之價。既有秦昭章臺之觀。而無蘭生詭奪之典。嘉貺益匪敢不飲承。謹奉賦一篇。以證揚麗質不白。

答東阿王賤

陳琳

琳死罪死罪。昨加恩辱命。并示龜賦。披覽粲然。君侯體高俗之材。秉青瑛于將之器。拂鐘無聲。應機立斷。此乃天然異稟。非鑽仰者所庶幾也。音義既遠。清辭妙句。炎絕煥炳。譬猶飛兔流星。超山越海。龍驤所不敢追。況於驚馬。可得齊足。夫鸚白雪之音。觀綠水之節。然後東野巴人。雖鄙益著。載懼載笑。欲罷不能。謹輶楨玩耽。次為吟頌。琳死罪死罪。

為曹公作書與孫權

阮瑀

離絕以來。于今三年。無一日而忘前好。亦猶姻媾之義。恩情已深。違異之恨。中間倚淺也。孤懷此心。君豈同哉。每覽古今所由改趣。因緣侵辱。或起瑕釁。心忿意危。用成大變。若韓信傷心於失楚。彭寵積望於無異。盧綰嫌長於已隙。英布憂迫於情漏。此事之緣也。孤與將軍。思如骨肉。割授江南。不屬本州。豈若淮陰捐畫之恨。抑遏劉頤。相厚益隆。寧放朱浮顯露之奏。無匿張勝貸故之變。非有陰搆賁赫之告。固非燕王淮南之釐也。而忍絕王命。明棄碩交。實為佞人所構會也。夫似是之言。莫不動聽。因形設象。易為變。觀示之以禍難。激之以恥辱。大丈夫雄心。能無憤發。昔蘇秦說韓。羞以牛後。韓王拔劍作色而怒。雖兵折地割。猶不為悔。人之情也。仁君年壯氣盛。緒信所鑒。既懼惠至。兼懷忿恨。不能復遠度孤心。近慮事勢。遂爾見薄之決計。乘翻然之成議。加劉備相扇揚。事結登連。推而行之。想暢本心。不願於此也。孤以薄德。位高任重。幸蒙國朝將泰之運。量平天下。懷集異類。喜得全功。長享其福。而姻親坐離。厚援生隙。常恐海內。多以相資。以為老夫包藏禍心。陰有鄙武取胡之詐。乃使仁君翻然自絕。以是忿忿。

懷愍反側。常思除棄小事。更申前好。三族俱榮。流祚後嗣。以明雅素中誠之效。抱懷數年。未得散意。昔赤壁之役。遭離疫氣。燒船自還。以避惡地。非周瑜水軍所能抑挫也。江陵之守。物盡穀殫。無所復據。徙民還師。又非瑜之所能敗也。荆土本非已分。我盡與君。冀取其餘。非相侵肌膚。有所割損也。思計此變。無傷於孤。何必自逐於此。不復還之。高帝設罾以延田橫。光武指河而誓朱鮪。君之負累。豈如三子。是以至情。願聞德音。往年在譙。新造舟船。取足自賊。以至九江。貴欲觀湖澤之形。定江漢之民耳。非有深入攻戰之計也。將恐議者大爲已榮。自謂策得。長無西患。重以此故。未肯廻情。然智者之感。慮於未形。達者所規。規於未然。是故子胥知姑蘇之有糜鹿。輔果誦智伯之爲趙盾。穆生謝病。以免楚難。鄒陽北游。不同吳禍。此四士者。豈聖人哉。徒通變思深。以微知著耳。以君之明。視孤術數。量君所據。相計土地。豈勢少力乏。不能遠舉。割江之表。晏安而已哉。甚未然也。若恃水戰。臨江塞。要欲令王師終不得渡。亦未必也。夫水戰千里。情巧萬端。越爲之軍。吳會不與。漢潛夏陽。魏豹不慮。江河雖廣。其長難衛也。凡事

有宜。不得盡言。將修舊好。而張形勢。更無以威脅重敵人之心。然有所恐。恐盡無益。何則。往者軍逼而自引還。今日在遠而興慰納。辭遜意狹。謂其力盡。適以增驕。不足相勸。但明效古。當自圖之耳。昔淮南信左吳之策。隗囂納王元之言。彭寵受親吏之計。三夫不寤。終爲世笑。梁王不受詭譎。竇融斥逐張玄。二賢既覺。福亦隨之。願仁君少留意焉。若能內取子布。外擊劉備。以效赤心。用復前好。則江表之任。長以相付。高位重爵。坦然可觀。上令聖朝無東顧之勞。下令百姓保安全之福。君享其榮。孤受其利。豈不快哉。君忽至誠。以處僥倖。婉彼二人。恐不加罪。所謂小人之仁。大人之賊。大雅之人。不肯爲此也。若憐子布。願言俱存。亦能傾心去恨。順君之情。更與從事。取其後善。俱會劉備。亦足爲效。開設二者。審處一焉。聞荆揚諸將。並得降者。皆言交州爲君所執。豫章距命。不承執事。疫旱並行。人兵損減。各求進軍。其言云云。孤聞此言。未以爲悅。然道路既遠。降者難信。幸人之災。君子不爲。且又百姓。國家之有。加懷區區。樂欲崇和。庶幾明德。來見昭訓。不勞而定。於孤益貴。是故棄兵守次。遣書致意。古者兵交使在其中。

願仁君及孤虛心迴意。是以應詩人補袞之歎。而慎周易幸復之義。濯麟清流。飛翼天衢。良時在茲。曷之而已。

在元城與魏太子陵

吳質

臣質言。前蒙延納。侍宴終日。嚶嚶匿景。繼以華燈。雖虞鄉適趙。平原入秦。受爲贈千金。浮觴旬日。無以過也。小器易盈。先取沈頓。醒寤之後。不諱所言。即以五日。到官。初至承前。未知深淺。然觀地形。察土宜。西帶恒山。連岡平代。北鄰柏人。乃高帝之所忌也。重以泚水。漸積疆宇。喟然歎息。思淮陰之奇譎。亮成安之失策。南望邯鄲。想廉頗之風。東接鉅鹿。存李齊之流。都人士女。服習禮教。皆懷慷慨之節。包左車之計。而質闇弱。無以掖之。若乃邁德種恩。樹之風聲。使農夫逸豫於疆畔。女工吟咏於機杼。固非質之能也。至於奉遵科教。班揚明令。下無威福之吏。邑無豪俠之傑。賦事行刑。資於故實。抑亦慄慄。有庶幾之心。往者嚴助。釋承明之歡。受會稽之位。壽王去侍從之娛。統東郡之任。其後皆克復舊職。追尋前軌。今獨不然。不亦異乎。張敞在外。自謂無奇。陳咸憤積。思入京城。彼豈

虛談夸論。詭曜世俗哉。斯實薄郡守之榮。願左右之勤也。古今一揆。先後不異。焉知來者之不如今。聊以當觀。不敢多云。質死罪死罪。

奏記詣蔣公

阮籍

籍

籍死罪死罪。伏惟明公。以合一之德。據上台之位。群英翹首。俊賢抗足。開府之日。人人自以爲掾屬。辟書始下。下走爲首。子夏處西河之上。而文侯擁篲。鄒子居黍谷之陰。而昭王陪乘。夫布衣窮居。羣帶之主。王公大人。所以屈體而下之者。爲道存也。籍無鄒下之德。而有其陋。狼頰大禮。何以當之。方將耕於東臯之陽。輸黍稷之稅。以避當塗者之路。負薪疲病。足力不彊。補吏之日。非所克堪。乞廻謬恩。以光清舉。

與廣川長岑文瑜書

應璩

璩

璩白。頃者炎旱。日更增甚。沙磧銷鑠。草木焦卷。虛涼臺而有鬱蒸之煩。浴寒水而有灼爛之慘。宇宙難廣。無陰以憩。雲漢之詩。何以過此。土龍矯首於空寺。泥人鶴立於闕里。修之歷旬。靜無徵效。明勸教之術。非致雨之備也。知恤下民。躬

自暴露。拜起靈壇。動亦至矣。昔夏禹之解陽肝。殷湯之禱桑林。言未發而水旋
 流。辭未卒而澤滂沛。今者靈重積而復散。雨垂落而復收。得無賢聖殊品。優劣
 異姿。割髮宜及膚。斷爪宜侵肌乎。周征殷而年豐。衛伐邢而致雨。善否之應。甚
 於影響。未可以爲不然也。想雅思所未及。謹書起予。應球白。

養生論

秘

康

世或有謂神仙可以學得。不死可以力致者。或云。上壽百二十。古今所同。過此
 以往。莫非妖妄者。此皆兩失其情。請試臆論之。夫神仙雖不可見。然配籍所載。
 前史所傳。較而論之。其有必矣。似特受異氣。稟之自然。非精學所能致也。至於
 導養得理。以盡性命。上獲千餘歲。下可數百年。可有之耳。而世皆不精。故莫能
 得之。何以言之。夫服藥求汗。或有弗獲。而愧情一集。淚然流離。終朝未餐。則羸
 然思食。而曾子銜哀。七日不饑。夜分而坐。則低迷思寢。內懷殷憂。則達旦不眠。
 勁刷理髮。醇醴發顏。僅乃得之。壯士之怒。赫然殊觀。植髮衝冠。申此言之。精神
 之於形骸。猶國之有君也。神躁於中。而形喪於外。猶君昏於上。國亂於下也。夫

爲稼於湯世。偏有一溉之功者。雖終歸於燠爛。必一溉者後枯。然則一溉之益。
 固不可誣也。而世常謂一怒不足以侵性。一哀不足以傷身。輕而肆之。是猶不
 識一溉之益。而望嘉穀於旱苗者也。是以君子知形恃神以立。神須形以存。恆
 生理之易失。知一過之害生。故修性以保神。安心以全身。愛憎不棲於情。憂喜
 不留於意。泊然無感。而體氣和平。又呼吸吐納。服食養身。使形神相親。表裏俱
 濟也。夫田種者一畝十斛。謂之良田。此天下之通稱也。不知區種可百餘斛。田
 種一也。至於樹養不同。則功收相懸。謂商無十倍之價。農無百斛之望。此守常
 而不變者也。且豆令人重。榆令人腹。谷歡調急。萱草忘憂。愚智所共知也。薑辛
 害目。豚魚不養。常世所誦也。蝨處頭而黑。麝食栝而香。類處險而變。蠶居晉而
 黃。推此而言。凡所食之氣。蒸性染身。莫不相應。豈唯蒸之使重。而無使輕。害之
 使闇。而無使明。薰之使黃。而無使堅。芬之使香。而無使凝。故神農曰。上藥養命。
 中藥養性者。誠知性命之理。因輔養以通也。而世人不察。惟五穀是見。聲色是
 耽。自惑之黃。耳務淫哇。滋味煎其府藏。醴醪亂其腸胃。香芳腐其骨髓。喜怒悖

其正氣思慮銷其精神。哀樂殃其平粹。夫以鼓爾之軀。攻之者非一。豈易竭之身。而內外受敵。身非木石。其能久乎。其自用甚者。飲食不節。以生百病。好色以勸。以致乏絕。風寒所災。百毒所傷。中道夭於衆難。世皆知笑悼。謂之不善持生也。至於措身失理。亡之於微。積微成損。積損成衰。從衰得白。從白得老。從老得終。悶若無端。中智以下。謂之自然。縱少覺悟。咸歎恨於所遇之初。而不知慎衆險於未兆。是猶桓侯抱將死之疾。而怒扁鵲之先見。以覺痛之日。爲病之始也。害成於微。而救之於著。故有無功之治。馳騁常人之域。故有一切之壽。仰觀俯察。莫不皆然。以多自證。以同自慰。謂天地之理。盡此而已矣。縱聞養生之事。則斷以所見。謂之不然。其次狐疑。雖少庶幾。莫知所由。其次自力服藥。半年一年。勞而未驗。志以厭衰。中路復廢。或益之以呾滄。而泄之以尾閭。欲坐望顯報者。或抑情忍欲。割棄榮願。而嗜好常在耳目之前。所希在數十年之後。又恐兩失。內懷猶豫。心戰於內。物誘於外。交賒相傾。如此復敗者。夫至物微妙。可以理知。難以目識。譬猶豫章生七年然後可斃耳。今以躁競之心。涉希望之塗。意速而事

通。望近而應遠。故莫能相終。夫悠悠者。既以未效不求。而求者以不專喪業。偏恃者以不兼無功。進術者以小道自滿。凡若此類。故欲之者。萬無一能成也。善養生者。則不然矣。清虛靜泰。少私寡欲。知名位之傷德。故忽而不營。非欲而強禁也。讀厚味之害性。故棄而弗顧。非貪而後抑也。外物以累心不存。神氣以醇白獨著。曠然無憂患。寂然無思慮。又守之以一。養之以和。和理日濟。同乎大順。然後蒸以靈芝。潤以醴泉。晞以朝陽。絃以五絃。無爲自得。體妙心玄。忘歡而後樂足。遺生而後身存。若此以往。恕可與羨。門比壽。王喬爭年。何爲其無有哉。

善哉行四首

魏文帝曹丕

上山采薇。薄暮苦飢。谿谷多風。霜露沾衣。野雉群雌。猿猴相追。還望故鄉。鬱何壘壘。高山有崖。林木有枝。憂來無方。人莫之知。人生如寄。多憂何爲。今我不樂。月日如馳。湯湯川流。中有行舟。隨波轉薄。有似客遊。策我良馬。被我輕裘。載馳載驅。聊以忘憂。

苦寒行

魏武帝曹操

北上太行山 艱哉何巍巍 羊腸阪詰屈 車輪爲之摧 樹木何蕭索
 北風聲正悲 熊羆對我隄 虎豹夾路啼 谿谷少人民 雪落何霏霏
 延頸長歎息 遠行多所懷 我心何佛鬱 思欲一東歸 水深橋梁絕
 中道正徘徊 迷惑失故路 薄暮無宿樓 行行日已遠 人馬同時餓
 擔簦行取薪 斧冰持作糜 悲彼東山詩 悠悠使我哀

芙蓉池作

魏

文帝

乘羣夜行遊 逍遙步西園 雙渠相溉灌 嘉木繞通川 卑枝拂羽蓋
 修條摩蒼天 羣風扶輪轂 飛鳥翔我前 丹霞夾明月 華星出雲圓
 上天垂光采 五色一何鮮 壽命非松喬 誰能得神仙 遊遊快心意
 保已終百年

美女篇

曹

植

美女妖且閑 采桑岐路間 柔條紛冉冉 葉落何翩翩 攘袖見素手
 皓腕約金環 頭上金爵釵 腰佩金琅玕 明珠交玉體 珊瑚間木難

羅衣何飄颻 輕裾隨風還 顧盼遺光彩 長嘯氣若蘭 行徒用息駕
 休者以安養 借問女安居 乃在城南端 青樓臨大路 高門結重關
 容華耀朝日 誰不希令顏 媒氏何所管 玉帛不時安 佳人慕高義
 求賢良獨難 衆人徒嗷嗷 安知彼所歡 盛年處房室 中夜起長歎
 白馬飾金羣 連翩西北馳 借問誰家子 幽并遊俠兒 少小去鄉邑
 揚聲沙漠垂 宿昔秉良弓 楛矢何參差 控弦破左的 右發摧月支
 仰手接飛猱 俯身散馬蹄 狡捷過猴猿 勇剽若豹螭 邊城多警急
 虞騎數遷移 羽檄從北來 厲馬登高隄 長驅蹈匈奴 左顧陵鮮卑
 棄身鋒刃端 性命安可懷 父母且不顧 何言子與妻 名編壯士籍
 不得中顧私 捐軀赴國難 視死忽如歸

三良詩

曹

植

功名不可爲 忠義我所安 秦穆先下世 三臣皆自殘 生時等榮樂

既沒同憂患 離言捐軀易 殺身誠獨難 攬涕登君墓 臨穴仰天歎
長夜何冥冥 一往不復還 黃鳥爲悲鳴 哀哉傷肺肝

公讌詩

曹

植

公子敬愛客 終宴不知疲 清夜遊西園 飛蓋相追隨 明月澄清景

列宿正參差 秋蘭被長坂 朱華冒綠池 潛魚躍清波 好鳥鳴高樹

神騰接丹戟 輕輦隨風移 飄飄放志意 千秋長若斯

吳天降豐澤 百卉挺蕪蕪 涼風撤蒸暑 清雲却炎暉 高會君子堂

並坐蔭華榭 嘉肴充圓方 旨酒盈金罍 管絃發徵音 曲度清且悲

合坐同所樂 但想杯行遲 常聞詩人語 不醉且無歸 今日不極歡

含情欲待誰 見眷良不翅 守分豈能違 古人有遺言 君子輒所殺

願我賢主人 與天享巍巍 克符周公乘 奕世不可追

賦史詩 王

自古無殉死 達人所共知 秦穆殺三良 惜哉空爾爲 結髮事明君

受恩良不替 臨沒要之死 焉得不相隨 妻子當門泣 兄弟哭路垂

臨穴呼蒼天 涕下如繩麻 人生各有志 終不爲此移 同知埋身劇

必亦有所施 生爲百夫雄 死爲壯士規 黃鳥作悲詩 至今聲不虧

明月照高樓 流光正徘徊 上有愁思婦 悲歎有餘哀 借問歎者誰

官是宕子妻 君行踰十年 孤妾常獨棲 君若薄路塵 妾若濁水泥

浮沈各異勢 會合何時諧 願爲西南風 長逝入君懷 君懷良不開

賤妾當何依

西京亂無象 豺虎方遘患 復棄中國去 遠身適荆蠻 親戚對我悲

朋友相追攀 出門無所見 白骨蔽平原 路有飢婦人 抱子棄草間

願聞號泣聲 揮淚獨不還 未知身死處 何能兩相完 驅馬棄之去

學 三 國 文

七哀詩三首

復棄中國去

遠身適荆蠻

親戚對我悲

朋友相追攀

出門無所見

白骨蔽平原

路有飢婦人

抱子棄草間

不忍聽此言 南登霸陵岸 迴首望長安 悟彼下泉人 喟然傷心肝
 荆蠻非我鄉 何爲久滯淫 方舟溯大江 日暮愁我心 山岡有餘暎
 巖阿增重陰 孤狸馳赴穴 飛鳥翔故林 流波激清響 猿猴臨岸吟
 迅風拂裳袂 白露霑衣襟 獨夜不能寐 攝衣起撫琴 絲桐感人情
 爲我盡悲音 羈旅無終極 憂思壯難任

贈從弟三首

汎汎東流水 磷磷水中石 蘋藻生其涯 華葉紛纒漚 采之薦宗廟
 可以羞嘉客 豈無園中葵 懿此出深澤 極枝一何勁 冰霜止慘懷
 亭亭山上松 瑟瑟谷中風 風聲一何盛 松栢有本性 奮翅凌紫氛 豈不常勤苦
 終歲常端正 豈不羅羅寒 於心有不厭 羞與黃雀群 何時當來儀 將須聖明君
 待五官中郎將建章臺集詩

朝馬鳴雲中 音響一何哀 問子遊何鄉 戢翼正徘徊 言我塞門來
 將就衡陽捷 往春翔北土 今冬客南淮 遠行蒙霜雪 毛羽日摧頽
 常恐傷肌骨 身損沈黃泥 簡珠墮沙石 何能中自諧 欲因雲雨會
 濯翼陵高梯 良遇不可值 伸眉路何階 公子敬愛客 樂飲不知疲
 和顏既以暢 乃肯顧細微 贈詩見存慰 少子非所省 爲且極歡情
 不醉其無歸 風百散爾位 以副飢渴懷

詠懷詩十七首第五

夜中不能寐 起坐彈鳴琴 薄帷鑒明月 清風吹我襟 孔鴻號外野
 翔鳥鳴北林 徘徊將何見 憂思獨傷心 天馬出西北 由來從東道 春秋非有記 富貴焉常保 清露被草蘭
 漉霜霑野草 朝爲擢少年 夕暮成醜老 自非王子晉 誰能常美好
 登高臨四野 北望青山阿 松柏鬪岡岑 飛鳥鳴相過 感慨懷辛酸
 怨毒常苦多 李公悲東門 蘇子狹三河 求仁自得仁 豈復歎咨嗟

支那三國時代終

平生少年時 輕薄好絃歌 西游咸陽中 趙李相經過 娛樂未終極
 白日忽嗟嗒 驅馬復來歸 反顧望三河 黃金百鎰盡 資用常苦多
 北臨太行道 失路將如何 出門臨永路 不見行車馬 登高望九州
 獨坐空堂上 誰可與歡者 離獸東南下 日暮思親友 晤言用自寫
 悠悠分曠野 孤鳥西北飛 燕歌行 魏文帝
 秋風蕭瑟天氣涼 草木搖落露為霜 群鸛辭歸雁南翔 念君客遊思斷
 腸 慊慊思歸戀故鄉 何為淹留寄化方 賤妾擎擎守空房 憂來思君
 不敢忘 不覺淚下霑衣裳 援琴鳴絃發清商 短歌微吟不能長 明月
 皎皎照我牀 星漢西流夜未央 牽牛織女遙相望 爾獨何辜恨河梁

明治廿七年四月廿七日印刷
明治廿七年四月三十日發行

定價金拾二錢



版權所有

著者 松井廣吉

發行者 大橋新太郎

日本橋區本町三丁目八番地

印刷者 杉原辨次郎

京橋區元數寄屋四丁目二番地

印刷所 杉原活版所

全所

東京日本橋區本町三丁目
發兌元博文館

34.127

著 君 吉 廣 井 松 軒 柏

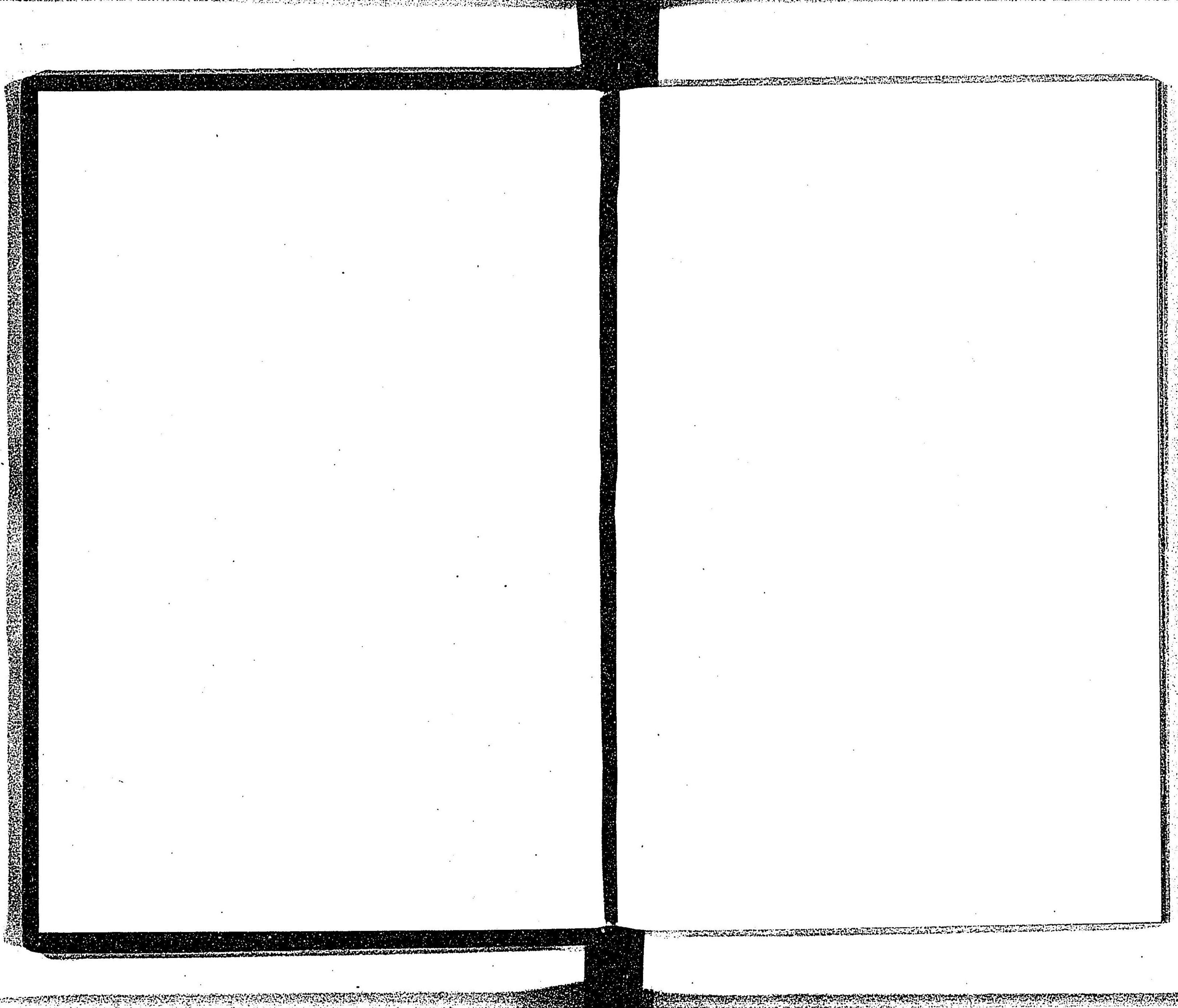
戰 國 時 代

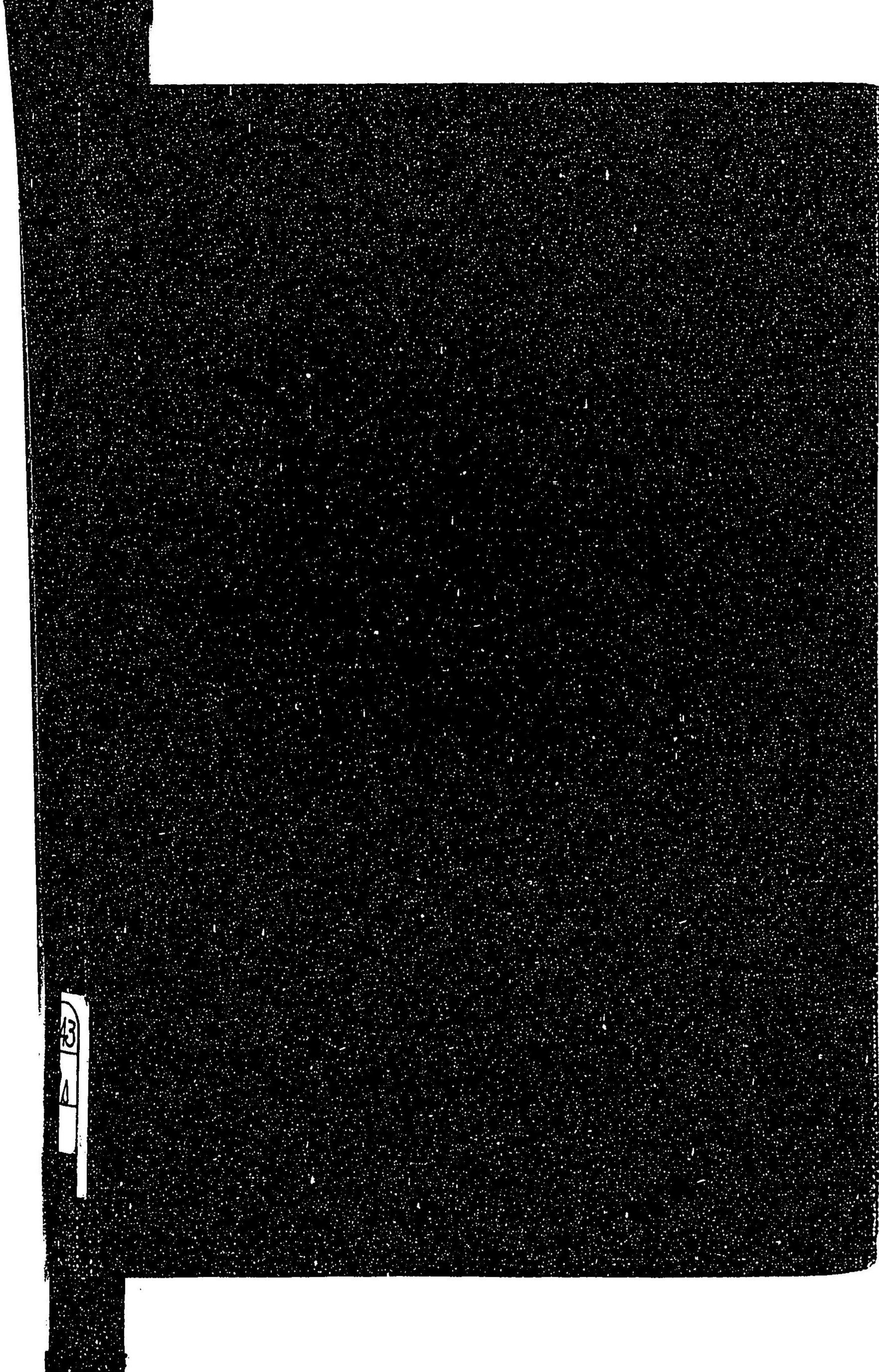
全 一 冊 紙 數 四 百 五 十 頁 洋 裝
正 價 金 三 拾 錢 郵 稅 六 錢

第一	崇勢	(戰國時代)
第二	光	(群雄割據)
第三	戰	(朝鮮征伐)
第四	武	(關原戰爭)
第五	健	(古人氣質)
第六	勇	(人種體格)
第七	智	(武勇)
第八	大	(戰法)
第九	文	(外交)
第十	紀	(詩歌)
第十一	傳	(年譜)
第十二	傳	(家傳)

三

戰國時代は日本人種の最も發達したる時代なり、勇武進取の氣象殆んど其の頂點に達せる時代なり「戰國時代」は乃ち能く當時の智勇辨力を描す、本書の著者曰く「歴史は人世の花なり根幹なり、國民の氣性を涵養し、之を鼓舞奮勵するの靈効あるのみならず、又國家の榮譽を發揚し、國民の品格を裝飾す」と「戰國時代」は果して我が「帝國の花」として榮譽を發作するに足る乎、「帝國の根幹」として我が國民の氣性を涵養するに足る乎、少くも本書の讀者を鼓舞激勵し、勇武進取の氣象を發揚せしむるに足る乎、江湖の君子請ふ本書を一讀して之を判せよ、





13

222.043
M289s

003094-000-1

222.043-M289s

支那三国時代

松井 広吉/著

M27

ACC-1103



2
M

